

開放性の類似が対人魅力に及ぼす効果

— Big Five 性格理論の枠組みを用いて —

Effects of Similarity relevant to Openness on Interpersonal Attraction

— An Application of the Big Five Personality Traits Model —

戸塚 唯氏

Tadashi TOZUKA

本研究は、Big Five モデルの枠組みを採用し、開放性の性格側面に関して対人魅力に及ぼす類似性の効果を実験的に検討した。分析対象者は129名（男性68名、女性61名）、平均年齢は18.43歳であり、彼らに架空の人物に関する文章（開放性を高くあるいは低く描写した）を読ませ、その後、質問紙に回答させた。独立変数は参加者開放性（高・低）、描写人物開放性（高・低）、描写人物性（男性・女性）であり、従属変数は好ましき得点、友人希望得点であった。分析の結果、2つの従属変数に関して参加者開放性の主効果やそれに関係する交互作用は見いだされず、開放性の側面における類似が対人魅力を増加させるという効果は確認できなかった。一方、2つの従属変数に関して描写人物開放性の主効果が見いだされ、社会的に望ましい特徴（本研究の場合には開放性が高いという特徴）が対人魅力に影響を与えていることが示唆された。

1. 問題

私たちがどのような属性を持つ人々に魅力を感じやすいのかという疑問は古くから存在し、社会心理学の対人魅力領域で早くから研究されてきた¹⁾²⁾。対人魅力とは人が他者に対して抱く好意や嫌悪のことであり³⁾、相貌や外見、性格等によって対人魅力が増減することが明らかとなっている。

中でも類似性が対人魅力に及ぼす影響については多くの研究がある。例えばByrne & Nelson⁴⁾は、いろいろな社会事象に対する態度の類似性を取り上げ、被験者が自分と態度の類似している対象をより魅力があると評定したことを報告している。また藤森⁵⁾は態度の類似性や話題の類似性を取り上げ、類似している対象がより魅力的

に見えたことを報告している。

また、態度の類似性だけでなく「性格」の類似性が対人魅力に及ぼす影響も検討されており、例えばHill, Rubin, & Peplau⁶⁾ やStevens, Owens, & Schaefer⁷⁾ は、性格の類似が対人魅力に正の影響を与えていることを示唆している。一方で、私たちは性格の類似によって魅力を感じるのではなく、社会的に望ましい性格の人に魅力を感じるという主張もある。例えば中里・井上・田中⁸⁾は、外向性・内向性という性格特性を用いて研究を行い、被調査者は類似した相手ではなく、社会的に望ましいと思われる特性を持った人を好意的に評価したことを報告している。また戸塚・狩野・上北⁹⁾は大学生被調査者の主観的類似感（高校生の頃の自分に高校生の対象人物が似ていると思うかどうかに関する指標）を利用した研究を行い、外向的な対象に対しては、内向的な参加者と外向的な参加者の間で好意度にあまり差がなかった（どちらも高い得点とつけた）と報告している。ただしこの研究では、内向的な対象に対しては内向的な被調査者の方が

連絡先：戸塚唯氏 t-tozuka@cis.ac.jp

千葉科学大学 教職課程

Professional Teaching Course, Chiba Institute of Science

(2015年9月19日受付, 2015年年12月7日受理)

好意的に評価する傾向があったことも報告しており、類似性が対人魅力に正の影響を与えている場合がある可能性も示唆した。このように性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果についての研究結果はやや混乱しており、最終的な結論を出すにはさらなる研究が必要であると思われる。

ところで、個人の全体的な性格を明らかにする尺度としてはBig Fiveモデル¹⁰⁾やエゴグラム¹¹⁾等が存在する。これらの尺度は人間を複数の側面から成るものとしてとらえており、例えばBig Fiveモデルは、開放性(Openness: 想像力、好奇心の強さ、新しいものへの志向性、遊び心などに関する構成概念)、誠実性(Conscientiousness: 自己統制、意思の強さ、まじめさなどに関する構成概念)、外向性(Extraversion: 外の世界への志向性、社交性、活動性などに関する構成概念)、調和性(Agreeableness: 協調性、控えめさ、利他性などに関する構成概念)、情緒不安定性(Neuroticism: 不安傾向、緊張の強さ、敏感さなどに関する構成概念)といった5つの次元を提唱している。またエゴグラムは、厳しい父親のような側面(Critical Parent)、やさしい母親のような側面(Nurturl Parent)、合理的な大人のような側面(Adult)、無邪気な子どものような側面(Free Child)、従順な子どものような側面(Adapted Child)の5次元を提唱している。Big Fiveモデルやエゴグラムが主張するように人間の全体的な性格が複数の側面から成っているものとするれば、対人魅力に及ぼす影響を検討するにはその側面ごとに類似性の効果を検討することが必要であろう。これまでの研究の多くは外向性-内向性の性格を用いているが、性格の類似性が対人魅力に及ぼす影響を総合的に明らかにするためには、どのモデルの枠組みを用いるにせよ、全ての性格側面について検討が必要であろう。

外向性以外の性格側面を用いて検討している研究に戸塚・上北・狩野¹²⁾がある。この研究ではBig Five尺度を利用して、情緒不安定性の類似性が対人魅力に及ぼす影響を検討している。その結果、実験参加者が情緒不安定性の側面で類似している他者を好むという結果は見受けられず、情緒が安定している他者を好むという結果が得られた。この結果は、中里他⁸⁾の「類似した他者でなく、社会的の望ましい特性を持つ人を好む」のだという主張を支持するものであった。また戸塚・狩野・上北¹³⁾は、Big Fiveモデルの調和性が対人魅力に及ぼす影響を検討した。その結果、実験参加者は調和性が高い他者を好んだ(すなわち社会的に望ましい特性を持つ対象を好んだ)が、「部分的に、調和性の高い実験参加者は低い実験参加者よりも、調和性の高い描写人物をより好ましく感じていた(すなわち、部分的には類似した他者を好んだ)」ことが報告されている。

このように、外向性の他にも情緒不安定性や調和性に

関する研究もあるが、開放性や誠実性の側面に関する研究は見受けられない。そこで本研究はBig Fiveモデルにおける開放性の側面の類似性が対人魅力に及ぼす影響を検討する。本研究によって、開放性の側面における類似性が対人魅力に影響を与えているか否かが明らかになるとと思われる。なお戸塚他¹²⁾の研究では、参加者情緒不安定性、参加者性(男性・女性)、描写人物情緒不安定性、描写人物性(男性・女性)の4要因を使って実験を行っていたが、参加者性の要因は従属変数にほとんど影響を及ぼしていなかったため、戸塚他¹³⁾の研究は参加者性の要因を削除し、参加者調和性、描写人物調和性、描写人物性の3要因を用いた実験を行っている。本研究もそれに準じて、3要因の実験を行うこととする。また、対人魅力は感情、認知、行動の3成分からなると考えられており¹⁴⁾、その3側面からの測定が可能である。すなわち、相手を好ましく思うか、相手の特徴・能力を高く評価するか、相手への接近行動をとるかという側面である。対人魅力を測定する際、本来この3側面全てを測定すべきであるが、本研究では感情成分と行動成分に関する側面のみを測定する。これは本研究が実験刺激に登場する人物の魅力を評定させるというデザインを採用しているためである。その刺激には登場人物の特徴・能力の高さがあらかじめ描写されているが、特徴・能力の高さはすなわち認知成分で測定する対象であり、このような実験デザインでは認知成分の測定は必要ないと考えた。

2. 方法

2.1 参加者と実験計画

参加者は、千葉県内の日本人大学生133名であった。このデータから、回答に欠損があった者4名のデータを削除し、分析対象者は129名(男性68名、女性61名)、平均年齢は18.43歳($SD = 0.62$)であった。

本研究の独立変数は、参加者の開放性(高・低)、描写人物の開放性(高・低)、描写人物の性(男性・女性)であった。前者1つが被験者間変数、後者2つが被験者内変数であり、 $2 \times 2 \times 2$ の8条件を設けた。

2.2 実験手続き

実験は2015年7月に大学の講義時間を利用して集団実施した。まず刺激文と質問紙からなる冊子(タイトルは「印象形成に関するアンケート」)を配布し、口頭ならびに小冊子の表紙の文章で教示を行った。なおその際には、①この実験への参加が個人の自由であること、②不参加であってもペナルティはないこと、③回答したくない項目には答えなくてよいこと、についても説明を行った。なお講義室には留学生も存在していたが、本研究が日本人学生向けの調査であることを説明し、全く別の質問紙に回答してもらった。

2. 3 小冊子の構成

実験で用いた小冊子(表紙を含めてA4用紙11枚)は6つのパートから構成されていた。第1パートは参加者の開放性を測定する12項目から成っていた。第2パートは「架空の人物A君(男性・中学3年生)に関する記述」と「A君の印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。A君は開放性が高いように描写されていた(約450字、補助資料1を参照)。第3パートは「架空の人物B君(男性・中学3年生)に関する記述」と「B君の印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。B君は開放性が低いように描写されていた(約465字、補助資料2を参照)。第4パートは「架空の人物Cさん(女性・中学3年生)に関する記述」と「Cさんの印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。Cさんは開放性が高いように描写されていた。Cさんに関する記述はA君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。第5パートは「架空の人物Dさん(女性・中学3年生)に関する記述」と「Dさんの印象を問う2項目」、「操作チェックのための7項目」から成っていた。Dさんは開放性が低いように描写されていた。Dさんに関する記述はB君に関する記述の性別と名前のみを変化させたものである。第6パートは人口統計学的データを採用するための項目から成っていた。

2. 4 質問項目

2. 4. 1 参加者の開放性

本研究では、基本的に和田¹⁰⁾のBig Five尺度において開放性を測定する12項目を使用した。ただしよりわかりやすい表現にするため、項目の語尾に手をくわえた。すなわち、和田¹⁰⁾は「独創的な」「進歩的」という表現を参加者に示し、どれだけ自分に当てはまるかを評定させたが、本研究は「独創的である」「進歩的である」という表現を参加者に示し、評定させた。また和田¹⁰⁾の研究では「多才の」という表現があったが、現代の大学生にはなじみのない表現のように思われたため、「様々な方面の才能がある」とした。使用した12項目は以下のとおりである。「独創的である」「様々な方面の才能がある」「進歩的である」「洞察力がある」「想像力に富んでいる」「美的感覚が鋭い」「頭の回転が速い」「臨機応変である」「興味が広い」「好奇心が強い」「独立している」「呑み込みが早い」。これらの特徴を自分にどれだけあてはまっているかを7段階尺度で回答させた(まったくあてはまらない1点、非常に当てはまる7点)。これらの12項目の α 係数を算出したところ、0.76であり、十分な内的整合性があると判断して、これらの12項目の平均を参加者の開放性得点とした。得点が高いほど開放性が高いことを示す。

2. 4. 2 A～Dさんへの印象

A～Dさんに関する記述を読んで、参加者がA～Dさんをどの程度好ましく思ったかを2項目で測定した(好ましくない1点、好ましい7点)(友人になりたくない1点、友人になりたい7点)。なおA～Dごとに、この2項目の α 係数を算出したところ、順に0.65、0.73、0.76、0.84であり、Aの数値がやや低いものの、2項目の平均をそれぞれの印象得点とすることもできる水準であった。しかし同様の項目を使って検討している戸塚他¹³⁾の研究では十分な α 係数が見いだされておらず、別個の指標として分析していることから、本研究でも比較のために別個に扱うこととした。以後本研究では、順に「好ましき得点」、「友人希望得点」と表現する。

2. 4. 3 操作チェック項目

本研究では、A君とCさんを開放性が高いように描写し、B君とDさんを開放性が低いように描写した。実験参加者が実験者の意図どおりに認識したかを明らかにするために、当該の描写人物がどの程度開放的であるかを「(独創的でない1点、独創的である7点)」「(好奇心が少ない1点、好奇心が多い7点)」「(興味の狭い1点、興味の広い7点)」という項目で回答させた。なおA～Dごとにこれら3項目の α 係数を算出したが、その値は順に0.56、0.54、0.68、0.57で、あまり高くなかったため、これらについても別個に扱うことにした。順に独創性得点、好奇心得点、興味得点とする。

ところで、Big Fiveモデルでは、開放性の他に調和性、外向性、情緒不安定性、誠実性といった性格側面を想定しているが、これらは互いに独立であるとみなされているわけではなく、ある程度の相関があると考えられている(例えば齊藤・中村・遠藤・横山¹⁵⁾によるBig Five尺度の因子分析では斜交回転が使用されている)。そのため、本研究のように描写人物の開放性を操作した場合に、他の側面(誠実性など)もつられて操作されてしまうことが考えられる。つまり、実験者が開放性を操作することを意図し、刺激文において開放性が高い(低い)人物を描写しても、参加者は描写人物の開放性を高く(低く)評価するだけでなく、例えば誠実性を高く(低く)評価してしまふことがありえる。本来、このような交絡は望ましくないが、ある程度許容せざるを得ないだろう。そもそもBig Fiveモデルの5側面が相関のあるものとして設定されているので、それらを独立に操作するのは困難であるといえる。しかし、多少の交絡であれば、実験目的を明らかにするうえで大きな障害にはならないだろうと思われる。ただ、どの程度、どのような交絡があるかは明らかにしておくべきであり、そのため本研究では描写人物の開放性の他に、調和性、外向性、情緒不安定性、誠実性についても評定させ、どの程度の交絡が生じ

ていたのか明らかにする。使用した項目は下記のとおりである。「(温和でない1点、温和である7点)」、「(外向的でない1点、外向的である7点)」、「(動揺しにくい1点、動揺しやすい7点)」、「(いいかげんでない1点、いいかげんである7点)」。順に調和性得点、外向性得点、情緒不安定性得点、誠実性得点と表記する。

2. 4. 4 人口統計学的変数

参加者の学年、性別、年齢、日本人であるかどうかを尋ねた。

3. 結果

3. 1 好ましさ得点、友人希望得点の平均と標準偏差

各実験条件の好ましさ得点と友人希望得点の平均と標準

偏差を表1に示す。同様に、各実験条件の操作チェック指標の平均と標準偏差を表2に示す。

3. 2 実験操作の適切性の検討

まず「参加者の開放性」の実験要因を作るために開放性得点 ($M = 4.24, SD = 0.76$) を使って、参加者を二分した。開放性得点の中央値は4.25であり、ちょうどその得点であった7名のデータを削除し、これより得点の高かった者たちを開放性高条件 ($n = 61$; 男性34名、女性27名)、低かった者たちを開放性低条件 ($n = 61$; 男性31名、女性30名) とした。開放性高条件 ($M = 4.84, SD = 0.45$) と低条件 ($M = 3.64, SD = 0.45$) の開放性得点を比較したところ、その差は有意であり ($t(120) = 14.73, p < .001$)、この分割が適切であることが確認された。

表1. 好ましさ得点、友人希望得点の平均と標準偏差

参加者開放性 描写人物開放性 描写人物性	<i>n</i>	H				L			
		H		L		H		L	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1.好ましさ	<i>M</i>	5.62	5.69	5.02	5.11	5.75	5.69	5.00	5.00
	<i>SD</i>	(1.28)	(1.10)	(1.23)	(1.24)	(1.12)	(1.07)	(1.20)	(1.33)
2.友人希望	<i>M</i>	5.44	5.46	5.28	5.21	5.38	5.31	5.11	4.97
	<i>SD</i>	(1.65)	(1.35)	(1.23)	(1.33)	(1.12)	(1.38)	(1.28)	(1.40)

注: 表中の「H」は参加者開放性あるいは描写人物開放性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

表2. 操作チェック項目の平均と標準偏差

参加者開放性 描写人物開放性 描写人物性	<i>n</i>	H				L			
		H		L		H		L	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
独創的である	<i>M</i>	5.07	4.92	4.49	4.38	4.93	4.92	4.08	4.05
	<i>SD</i>	(1.53)	(1.28)	(1.75)	(1.58)	(1.49)	(1.46)	(1.57)	(1.63)
好奇心が多い	<i>M</i>	6.49	6.38	2.72	2.98	6.56	6.11	2.48	2.67
	<i>SD</i>	(1.18)	(0.90)	(1.34)	(1.31)	(0.90)	(0.93)	(1.09)	(1.11)
興味の広い	<i>M</i>	6.15	6.25	2.57	2.64	6.34	6.20	2.64	2.70
	<i>SD</i>	(1.42)	(1.01)	(1.02)	(1.13)	(1.11)	(0.95)	(1.24)	(1.12)
温和である	<i>M</i>	5.16	4.87	5.72	5.46	5.51	4.85	5.67	5.54
	<i>SD</i>	(1.20)	(1.31)	(1.29)	(1.47)	(1.16)	(1.50)	(1.34)	(1.42)
外向的である	<i>M</i>	5.89	6.07	3.18	3.28	6.20	6.08	2.80	2.64
	<i>SD</i>	(1.20)	(1.12)	(1.19)	(1.37)	(0.95)	(1.14)	(1.08)	(1.03)
動揺しやすい	<i>M</i>	4.02	3.89	3.44	3.41	4.02	4.43	2.90	3.02
	<i>SD</i>	(1.71)	(1.54)	(1.87)	(1.56)	(1.57)	(1.27)	(1.48)	(1.37)
いいかげんである	<i>M</i>	3.57	3.62	2.67	2.57	3.69	3.62	2.84	2.43
	<i>SD</i>	(1.61)	(1.49)	(1.54)	(1.53)	(1.35)	(1.42)	(1.54)	(1.22)

注: 表中の「H」は参加者開放性あるいは描写人物開放性が高いことを示す。「L」は低いことを示す。

次に、「描写人物の開放性」の実験操作の適切性を確認するために、独創性得点、好奇心得点、興味得点をそれぞれ従属変数としたANOVAを行った。いずれも独立変数は参加者の開放性(高・低)、描写人物開放性(高・低)、描写人物性(男性・女性)である。独創性得点に関するANOVAでは描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 61.33, p < .001$)が見いだされた。すなわち描写人物開放性低条件よりも描写人物開放性高条件の方で得点が大きかった。好奇心得点に関するANOVAでは①描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 648.55, p < .001$)、②描写人物開放性と描写人物性の交互作用($F(1,120) = 14.09, p < .001$)が見いだされた。①については、描写人物開放性低条件よりも描写人物開放性高条件の方で得点が大きかった。②について下位検定を行ったところ、描写人物男性条件における描写人物開放性の単純主効果(描写人物開放性高条件の方で得点が大きい)、描写人物女性条件における描写人物開放性の単純主効果(描写人物開放性高条件の方で得点が大きい)、描写人物開放性高条件における描写人物性の単純主効果(描写人物男性条件の方で得点が大きい)、描写人物開放性低条件における描写人物性の単純主効果(描写人物女性条件の方で得点が大きい)が見いだされた。興味得点に関するANOVAでは描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 616.73, p < .001$)が見いだされた。すなわち描写人物開放性低条件よりも描写人物開放性高条件の方で得点が大きかった。

次に、描写人物開放性の操作によってBig Fiveモデルの他の4側面がどの程度影響を受けたのかを明らかにするために、調和性得点、外向性得点、情緒不安定性得点、誠実性得点を従属変数としたANOVAを行った。いずれも独立変数は参加者の開放性(高・低)、描写人物開放性(高・低)、描写人物性(男性・女性)である。調和性得点に関するANOVAでは、描写人物性の主効果($F(1,120) = 13.78, p < .001$)、描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 30.50, p < .001$)が見いだされた。外向性得点に関するANOVAでは、描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 499.49, p < .001$)、参加者の開放性と描写人物開放性の交互作用($F(1,120) = 5.94, p < .05$)が見いだされた。情緒不安定性得点に関するANOVAでは、描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 25.85, p < .01$)、参加者の開放性と描写人物開放性の交互作用($F(1,120) = 4.41, p < .05$)が見いだされた。誠実性得点に関するANOVAでは、描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 35.36, p < .001$)が見いだされた。

3.3 A～Dさんへの印象に対する実験操作要因の影響

好ましき得点、友人希望得点を従属変数として3要因のANOVAを行った。いずれも独立変数は参加者の開放性(高・低)、描写人物開放性(高・低)、描写人物性(男

性・女性)である。好ましき得点に関するANOVAでは描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 30.93, p < .001$)が見いだされた。すなわち、描写人物開放性高条件($M = 5.69, SD = 1.13$)の方が低条件($M = 5.03, SD = 1.25$)よりも好ましき得点が高かった。その他の主効果、交互作用は見いだされなかった。

次に、友人希望得点に関するANOVAの結果、描写人物開放性の主効果($F(1,120) = 4.12, p < .05$)が見いだされた。すなわち、描写人物開放性高条件($M = 5.40, SD = 1.45$)の方が低条件($M = 5.14, SD = 1.31$)よりも友人希望得点が高かった。その他の主効果、交互作用は見いだされなかった。

4. 考察

4.1 操作チェックについて

独創性得点と興味得点に関しては、描写人物開放性の主効果のみが見られた。好奇心得点に関しては、描写人物開放性の主効果に加えて描写人物開放性と描写人物性の交互作用が見いだされたが、下位検定を行ったところ、描写人物開放性高条件において得点が大きいという方向の単純主効果であったことから、「描写人物開放性」の操作は成功したとみなした。

次に今回の実験操作によるBig Fiveモデルの他の4側面への影響についてだが、あらかじめ予想していたように、調和性、外向性、情緒不安定性、誠実性得点でいくつかの主効果や交互作用が見られた。特に描写人物開放性の主効果が4つの指標全てで見いだされていることから、開放性が他の4側面全てと一定の相関関係にあることが示唆された。本研究の結果の解釈は、その点を踏まえた上でなされるべきである。

4.2 性格の類似が対人魅力に及ぼす影響

好ましき得点と友人希望得点に関するANOVAの結果、どちらの従属変数においても描写人物開放性の主効果のみが見られ、参加者開放性の主効果や他の交互作用は見られなかった。この結果は、特徴の社会的望ましき(開放性の高さ)が対人的魅力を生じさせており、開放性の側面における参加者と描写人物との類似はそれを生じさせていないことを意味している。この結果は、外向性を扱った戸塚他⁹⁾の研究、調和性を扱った戸塚他¹³⁾の研究の結果と異なっていた。これらの先行研究では、社会的望ましきの強い影響は確認されたものの、部分的には類似性の影響が見られている。本研究で類似性の効果が全く認められなかった理由として以下の2つの可能性が考えられる。1つ目は、開放性の性格側面においては類似性の効果がない、あるいは検出できないほど小さいという可能性である。好奇心などに代表されるような開放性の側面は、外向性や調和性などよりも目立たな

いのかもしれず、そのために類似性の効果は他の側面に比べて相対的に小さいといのかもしれない。2つ目は、多くの参加者が開放性の側面で自分と類似していると感じなかった可能性である。本研究では描写人物開放性高条件(A君、Cさんの条件)で、「アメリカ人の奥さんをお願いして英会話を学んでいる」「わざわざ・・・記念館を見に行った」等の開放性の高さを強調するような描写を行い、描写人物開放性低条件(B君、Dさんの条件)で、「保守的なところがある」「服装にも興味が無い」等の開放性の低さを強調する描写を行っていた。しかしこれらの描写はやや極端で最近の若者の行動や特徴から乖離していたかもしれない。例えば「アメリカ人の奥さんをお願いして英会話を学ぶ」などというA君の行動は、一般的な若者はあまり行わないものであったかもしれない、開放性の高い参加者たちでさえA君の行動を奇妙なものとして受け取り、「自分とは類似していない」と感じ、結果として類似性の効果が生じなかった可能性がある。「描写人物が自分と似ていると思うか」を問う項目をあらかじめ質問紙に入れておけば、この点が検証できたであろう。また大学生参加者に中学生の描写人物を評価させたことにも問題があったかもしれない。大学生の描写人物を使っていればより類似していると考えた可能性がある。今後類似の研究を行う際には考慮するべきであろう。

4. 3 今後の課題

上述のように、本研究においては開放性の性格側面における類似性の効果は見られなかった。前節で考察したように、これが普遍的な結果であるのか、実験刺激(A～Dさんを描写した文章)の不適切さによるものかは現段階では断言できない。今後、実験刺激や測定項目を改善した上で再検討の必要があると考える。ただし、本研究や先行研究の結果から考えて、開放性の側面で類似性の効果が見られるにしても、その効果は弱く、社会的望ましさの効果を覆すほどではないと思われる。また本研究ではBig Fiveモデルが提唱する開放性を検討したが、まだ研究が行われていない誠実性の性格特性についても検討をしていく必要がある。将来的には、5側面すべての性格特性を同時に扱い、部分的な類似や全体的な類似の効果を検討していくことが必要である。

類似性が対人魅力に及ぼす効果は社会的望ましさの効果よりも小さいものであるが、その知見は重要であり、社会の様々な場面で有用であろうと思われる。例えば教育場面においては教師が児童生徒の意欲や関心等を評価する機会が多いが、もしかしたら教師は自分と類似している(していない)他者に対して、実際以上に好意的な(非好意的な)評価を下しているかもしれない、それによって適切な評価がゆがめられているかもしれない。類似性と対人魅力に関する研究によって、その生起機制や影

響力の大きさが明らかとなれば、私たちはより正確な人物評価が可能になるだろうと考えられる。今後この領域の研究がより活発になることが望まれる。

引用文献

- 1) Walster E, Aronson V, Abrahams D, & Rottman L : Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516, 1966.
- 2) Lott A. L, & Lott B. E. : The role of reward in the formation of positive interpersonal attitudes, *Foundations of interpersonal attraction*. T. L. Huston, New York, Academic Press, 171-192, 1974.
- 3) 奥田秀宇: 対人魅力, 心理学辞典. 中島義明, 安藤清志, 子安増生, 坂野雄二, 繁樹算男, 立花政夫, 箱田裕司(編集). 初版, 有斐閣, 550, 1999.
- 4) Byrne D, & Nelson D : Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 374-380, 1965.
- 5) 藤森立男: 態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果—魅力次元との関連において—. *実験社会心理学研究*, 20, 35-42, 1980.
- 6) Hill C. T, Rubin Z, Peplau L.A : Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of Social Issues*. 32, 147-168, 1976.
- 7) Stevens G, Owens D, Schaefer E.C : Education and attractiveness in marriage choices. *Social Psychology Quarterly*, 53, 62-70, 1990.
- 8) 中里浩明, 井上 徹, 田中国夫: 人格類似性と対人魅力—一向性と欲求の次元—. *心理学研究*, 46, 109-117, 1975.
- 9) 戸塚唯氏, 狩野勉, 上北彰: 年少者に対する評価における類似性バイアス. *国際教育研究所紀要*, 15, 17-27, 2005.
- 10) 和田さゆり: 性格特性用語を用いたBig Five 尺度の作成. *心理学研究*, 58, 158-165, 1996.
- 11) 新里里春訳: エゴグラム. 創元社, 1980 (Dusay J.M : *Egograms : How I see you and you see me*. N.Y., Harper & Row, 1977) .
- 12) 戸塚唯氏, 上北彰, 狩野勉: 情緒不安定性の類似が対人魅力に及ぼす効果. *千葉科学大学紀要*, 4, 45-53, 2011.
- 13) 戸塚唯氏, 狩野勉, 上北彰: 調和性の類似が対人魅力に及ぼす効果 — Big Five 性格理論の枠組みを用いて—. *国際教育研究所紀要*, 22, 31-41, 2011.
- 14) Berscheid E, & Walster E : *Interpersonal attraction*. Addison-Wesley, 1969.
- 15) 齋藤崇子, 中村知靖, 遠藤利彦, 横山まどか: 性格特性用語を用いたBigFive 尺度の標準化. *九州大学心理学研究*, 2, 135-144, 2001.

補助資料1. A君に関する描写

A君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。成績は中程度であり、スポーツは得意です。

A君は友達も多く、クラスでちょっと目立つ存在です。いろいろなことに興味をもち、チャレンジしています。例えば、A君は英語が好きなのですが、教科書の勉強だけではあきたらず、近所に住むアメリカ人の奥さんをお願いして英会話を学んでいます。また歴史の授業で伊能忠敬に興味を持ったA君は、わざわざ佐原まで出かけて行って、記念館を見てきました。またA君は学校の成績は普通ですが、頭の回転は速い方であり、スマートフォンやパソコンの新しい機能などを積極的に活用するのが得意です。美的なセンスもあるようで、いつもちょっとしゃれた服を着ています。A君の友だちは、A君の興味の広さにとどき驚きますが、好奇心が強く前向きなA君を好ましく思っています。

このようにA君はチャレンジ精神が旺盛なのですが、一方で、ややおっちょこちょいな面もあります。たまに失敗もします。しかしA君は自分の性格を気に入っており、特に変えようという気持ちはないようです。

補助資料2. B君に関する描写

B君は、千葉県内に住む中学3年の男子生徒です。成績は中程度であり、スポーツも不得意ではありません。

B君はそれなりに親しい友達はいる方ですが、クラスでそれほど目立つ存在ではありません。友達からは「落ち着いた性格で一緒にいて楽だ」「しっかりしている」とよくいわれます。ただちょっと保守的なところがあるかもしれません。あまり積極的に趣味を広げようとは思ってはならず、今の趣味に集中したいと思っています。新しい製品にもあまり興味はありません。友達は、スマートフォンやパソコンの新しい製品を手に入れると嬉しそうにしていますが、B君は新しい機能を覚えて使うのはとても面倒に思えるので、あまり新しい製品をほしいとは思いません。服装にもそれほど興味がないようです。

全体的に、B君は新しいことにチャレンジするのに消極的であるといえます。しかしそれは必ずしも悪いことではないでしょう。それまでのやり方を大事にするB君のスタイルは、B君に落ち着きと分別をもたらしています。B君自身も、今の性格を気に入っており、特に変えようという気持ちはないようです。